

青森山田

2009年夏以来の甲子園となる青森山田。県外出身者が大半を占めたかつての姿と異なり、現チームは本県出身者が約6割を占めている。

主将の内山昂志をはじめ、青森市出身の相坂大真、黒石市出身の工藤飛馬らがレギュラーに定着。県外から入学してきた部員と溶け込み合い、刺激し合い、新たな力を生み出している。

兜森崇朗監督の指導方針は選手たちの自主性の尊重。選手たちは自ら考え、体づくりや筋力強化に取り組んできた。兜森監督は「雪国だから

選手の自主性を尊重

らって、言い訳にならない。恥ずかしい試合はできないぞ」と選手たちに活を入れる。

2週間に1度は五所川原市のつがる克雪ドームなど土のグラウンドを利

用。試合感覚が鈍らない。静岡県に遠征もした。「全員野球、全力プレー」を掲げる兜森監督。

チームカラー

田陣を組み、兜森監督から指導を受ける青森山田ナイン。2月26日、つがる克雪ドーム

かつて青森山田リトルシニア時代にも指導を受けた4番・三森大貴は「基本に忠実に、守備から流れをつくる。そして、少ない得点でも勝てる野球」と、自分たちの目指すところを語る。内山は「取るべきアウトを確実に取り、気がついたら丸回になっていて、1点差で勝つ試合が理想」と話した。

選抜大会の目標は日本一。内山は「これまで八学光星と切磋琢磨(せつさくさくま)して、甲子園を沸かせてきた。青森県から2チームが出場する以上、意識せざるを得ない。お互い戦い戦勝ち抜き、決勝で戦いたい」と力を込めた。

2強 聖地へ 青森山田・八学光星 センバツ出場

八学光星

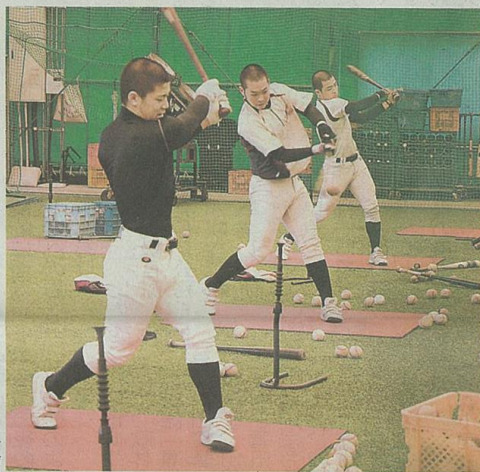
東北大会決勝での敗戦で、八学光星は一つのスローガンを決めた。「猛打、強打の光星復活」。3季連続準優勝の時のような、破壊力ある打撃を目指そうと、冬場の練習に取り組んだ。

同大会後、仲井宗基監督は「全国クラスの投手(の球)を打てる打力をつけよう」と選手たちに

猛打復活へ集中強化

指示。打撃、守備など、バットを振った。奥村幸るなど、基本を鍛え直し日にちによって分けていた練習内容を変え、「ひしひしと破れてしま

たずら打撃だった(仲井監督)。練習の8割ほどを打撃強化に充てた。12月末、2週間の強化練習期間は1日千本以上の素振りを取り入れバットを使った。初めは



「猛打、強打の光星復活」を目指し、黙々と打撃練習に取り組む八学光星の選手たち。5日午前、八戸市美保野の室内練習場

冬場の練習について指揮官は「スイングの形、スピード、打球の速さも変わったと実感している。見てくださった方々がわくわくするような試合をしたい。青森旋風を巻き起こしたい」と手応え。奥村は「もちろん全国制覇を目指すか、先を見ず目の前の一戦一戦をしっかりと戦いたい」と意気